

Z110r ガラス乾板写真から読み解く緯度観測所の女性たち

馬場幸栄（国際日本文化研究センター）

緯度観測所は、明治32年に岩手県の水沢に設立され、昭和63年に国立天文台水沢に改組された、国立の研究機関である。同観測所では大正12年に初の女性所員が採用され、以降、昭和63年まで多数の女性が勤務していた。第二次世界大戦中には短期間ではあるが緯度観測所内に水路部分室が設置され、そこでも多くの女性が勤務していた。緯度観測所の女性所員たちが担当した業務は主に計算作業であり、同観測所の主要事業であった国際緯度観測事業（ILS）や国際極運動観測事業（IPMS）などを計算係として支えていた。計算のほかにも、日本語や英語でのタイピング、報告書の編集・出版、ガラス乾板に撮影された天体の記録、各種事務を担当することもあった。女性所員たちは当初、算盤、計算尺、手回し計算機を使って計算作業を行っていたが、緯度観測所に大型電子計算機が導入されてからはパンチカードの穿孔や電子計算機のオペレーションおよびメンテナンスを担当するようになった。女性所員のほとんどは非正規職員として雇用されていたが、昭和後期になるとごく少数ではあるが女性も正規職員として雇用されるようになった。そして、そのなかから、国立天文台初の女性天文学者が誕生した。緯度観測所の女性所員たちに関するこれらの歴史情報は、デジタル技術によって復元された緯度観測所時代のガラス乾板写真とその聴き取り調査によって明らかになったものである。本講演では、ガラス乾板をデジタル化した方法や復元されたガラス乾板写真を紹介しつつ、緯度観測所の女性所員たちが近代天文学史において果たした役割とその影響について論じる。